

変容する人の移動と移民研究

網中昭世

世界を飛び回るグローバル・エリートがいる一方で、命がけで国境を越えようとする者もいるように、出生国以外の国に居住する国際移民には様々な人々が含まれる。長期間滞在する低技能移民と、対照的に期間限定の高技能移民、正規に入国したものの査証の有効期限を超えて滞在する非正規移民、そして難民や亡命希望者も含む強制移民、家族の呼び寄せによる家族移民、さらには一定期間海外に居住した後に出身国に戻る帰還移民など、実に多様な形態で人は移動している。

●地域再編と人の流れ

まず、過去半世紀あまりの国際移民の動向を振り返ってみよう。1973年のオイルショック以降の景気後退と労働移民の大量雇用の打ち切りを反映すれば国際移民は減少しそうなものだが、実際には増加した。国連経済社会局人口部（UNDESA）によれば、国際的な移民人口（ストック）は1980年に1億200万人（世界人口比2.3%）、2000年に1億7300万人（同2.8%）、2015年に2億4400万人（同3.3%）と増加している（参考文献①）。こうした国際移民には東西冷戦終結後に頻発した紛争による難民も含まれるが、以下、本稿では、労働移民を中心に扱う¹⁾。

国際移民が増加した背景には、雇用を失った労働移民が帰国するのではなく、家族を呼び寄せる再統合や連鎖移住があった。また、東西冷戦後の地域再編によって旧ソ連圏の国々がEUに加盟し、東欧から西欧への移民も増加した。さらに、グローバル化にともなって米国が1990年代に新たに技能移民を受け入れた。このような多面的な変化を受け、2015年時点では移民を抱える国の上位5カ国およびその規模は、アメリカ合衆国（4660万人）、ドイツ（1200万人）、ロシア連邦（1160万人）、サウジアラビア（1020万人）、イギリス（850万人）となっている。

とりわけグローバル化以降の国際移民は次のように特徴づけられるだろう。第1に、全般的な増加傾向である。第2に、移動の方向性の多様化である。移民は貧しい「南」の開発途上国から豊かな「北」の先進国へ移動すると考えられがちだ。しかし実際には、2015年の国際移民のうち37%が「南南」の移動であり、「南北」の移民比率35%を上回った。同年、「北北」の先進国間の移民は23%、「北南」の移民も6%あった（参考文献①）。さらに特徴の第3に、移民の女性化が挙げられる。そして第4に、これらの特徴の基底となっているグローバル化の影響がある。

●移民の女性化が意味するもの

——介護・家事労働の市場化——

近年の国際移民の特徴の1つである移民の女性化についてアジアを事例に見てみよう。アジア地域全体でみると地域内に送出国と受入国が混在するため、2015年の女性移民比率は42%と均されてしまうが、代表的な受入地域である香港では60.5%に上る。さらに香港の女性移民の内訳を年齢集団別にみると1990年時点では25～29歳の女性率が最も高く53.0%であったが、2015年には年齢集団が30～34歳に移り、その比率は75.9%にまで増加している（参考文献②）。

現代の女性移民は、しばしば受入国社会の少子高齢化や女性の「社会進出」によって不足しがちな介護福祉分野および家事代行サービスなどの労働を担っている（参考文献③）。移民の女性化と介護・家事労働への集中の傾向は日本にも当てはまる。1990年時点、バブル末期の日本では興行ビザで入国する20～24歳の年齢集団が最多で50.6%であった。しかし2008年・09年には日本でのインドネシア、フィリピンからの看護師・介護福祉士候補者の受入れを挟んで、2015年時点で女性比率が高いのは44～49歳の年齢集団に移り、そ

の比率は62.9%に増加している（参考文献②）。

人材が不足する医療・介護労働をめぐる国際移動はアジアに限らず世界中で起きている。インドからアメリカへ、あるいは英語圏アフリカ諸国からイギリスへの「南北」移動が生じ、その穴埋めをすべくアフリカ内部での「南南」移動が発生した（参考文献④）。こうした移民が受入国の政策の変化に翻弄される一方で、その移動性を最大限に活用して社会的上昇を遂げる主体が女性化していることも確かだ（参考文献⑤）。

●研究潮流の変化

労働移民は短期的な産業予備軍として、雇用調節と低賃金労働を可能にするという経済学的な理解がある。その一方で、労働移民のための社会的負担が受入地域の資本蓄積のためには不利となり、経済学的説明は部分的にしか有効ではない。そこで労働移民というテーマは経済学を超えた分析枠組みを必要とし、社会学がそれを補う視角を積極的に提供してきた。

たとえば、労働移民が帰国せず、そのうえ、受入社会に統合されるわけではないことが明らかになると、共生の論理を模索して多文化主義の概念が生まれた。また、移民集団を分析する手がかりとしてエスニシティの概念が生まれ、トランスナショナルな社会資本を動員して帰属集団や出身地の開発を促進する主体として現代の「ディアスポラ」の役割が注目された（参考文献⑥）。これに関連して移民による海外送金や、一時的な頭脳流出から転じて頭脳循環を引き起こす循環的移民の登場が開発に利益をもたらすと論じられる（参考文献⑦）。しかし、越境的な活動の主体性が注目される一方で、国境管理の手法や生体認証技術を相互に参照し、国境を管理下に置こうとする国家が存在することも厳然たる事実である（参考文献⑧）。

移動する人とそれを管理しようとする国家との相互作用も含め、人の移動は今後も日々形態を変化させつつ、増加するであろう。実務・研究の別を問わず、人の移動というテーマをめぐる課題への取り組みは、問題解決の糸口を提供するだけでなく、当該研究領域の深化・発展をいっそう促すだろう。

（あみなか あきよ/アジア経済研究所 アフリカ研究グループ）

《注》

(1) UNDESAは各国の国勢調査、住民票などから国際移民を集計し、その統計は難民も含む。なお、UNHCRによれば2016年には難民や亡命希望者、飢餓や自然災害からの避難者を含む6550万人が移住を強いられた強制移民となった。そのうち、2250万人が難民であり、2011年から65%増加している。

《参考文献》

- ① IOM, *Data Bulletin: Informing a Global Compact for Migration*, No.1, 2017 (http://publications.iom.int/system/files/pdf/global_migration_trends_data_bulletin_issue_1.pdf 2017年12月6日アクセス)。
- ② United Nations, Department of Economic and Social Affairs (UNDESA), *Trends in International Migrant Stock: Migrants by Age and Sex*, 2015 (United Nations database, POP/DB/MIG/Stock/Rev.2015) (<http://www.un.org/en/development/desa/population/migration/data/estimates2/estimates15.shtml> 2017年12月6日アクセス)。
- ③ Hochschild, Arlie Russell, “Global Care Chains and Emotional Surplus Value,” Will Hutton and Anthony Giddens eds., *On the Edge: Living with Global Capitalism*, London: Vintage, 2000, pp.130-146.
- ④ 佐藤千鶴子「看護師の国際移動——アフリカの事例から——」『アジア研ワールド・トレンド』No.264、2017年、22～25ページ。
- ⑤ George, Sheba Mariam, *When Women Come First: Gender and Class in Transnational Migration*, California: University of California Press, 2005 (ジョージ、シバ・マリヤム著、伊藤るり訳『女が先に移り住むとき——在米インド人看護師のトランスナショナルな生活世界——』有信堂高文社、2011年)。
- ⑥ Cohen, Robin, *Global Diasporas: An Introduction*, London: UCL Press, 1997.
- ⑦ Castles, Stephen and Mark J. Miller, *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*, 4th edition, London: Palgrave Macmillan, 2009 (関根政美・関根薫監訳『国際移民の時代』第4版、名古屋大学出版会、2011年)。
- ⑧ 柄谷利恵子『移動と生存——国境を越える人々の政治学——』岩波書店、2016年。